

# 「選択漁獲は古いのか?! — Science論文の意義を探る」

## 1. 国際的な議論の経緯

有元貴文 (海洋大)

漁業とは本質的に選択的なものであり、漁業者は漁場や漁期に応じて生態系のなかから特定の対象を狙うために漁具を使いこなしてきた。この選択漁獲の機能をどのように発揮させるかが、漁具設計や操業方法の技術であった。このなかで、幼稚魚保護や希少種混獲を避けるための技術が研究されてきた。これに対して、選択漁獲によって生じる生態系の構造や機能の変化が、生態系全体の生産力や回復力、そして漁業の持続性にまで影響するかもしれないことが危惧され始めた。生態系アプローチによる漁業管理の方向の中で、漁具選択性の概念を再検証し、バランスのとれた収獲戦略に向けた道を探る必要があるとするものであった。

2010年に名古屋で開催された生物多様性条約会議COP10のサイドイベントとして、国際自然保護連合 生態系管理委員会 漁業専門家グループ (IUCN/CEM/FEG) のワークショップが開催された。会議成果として公表されたものが、2012年 Science誌に掲載の「Reconsidering the consequences of selective fishing」であった。漁業技術系の分野では選択漁獲の問題は長く研究の主流をなしており、網目選択性の評価や混獲防除装置の技術開発が現在でも中心的課題として各国で活発に進められている。その意味では、この会議を通じて「これまでの研究は何だったのか、これからどう進めば良いのか?」という根源的な質問を投げかけられたことになる。ここに至るまでの経緯について、日本と世界での動きを振り返ってみる。

日本水産学会で関連するシンポジウムがいくつか開催されてきた。1979年の「漁具の選択作用」、1995年「わが国の漁業における混獲の実態とその対策」、そして漁業懇話会等での議論が続けられ、資源管理型漁業、TAC制度、資源回復計画といった流れの中でも、技術的方策として幼稚魚保護という選択漁獲が積極的に取り上げられるに至った。同時に混獲投棄の防除、そして逃がした魚の生残性を問題にする新しい研究の方向も始まり、この分野を先導していたICESの漁業技術・魚群行動部会(FTFB)での議論の内容や調査研究の進め方がわが国に紹介されてきた。

ある資源について過剰漁獲が進むと成熟個体が小型化することは理解しやすい。しかし、Science誌の論文では、大型個体から選択的に専獲することで生態系の構造を乱し、生態系機能に影響を及ぼす可能性をあげている。しかし、過剰な漁獲努力量を是正することが優先課題ではないかという議論も残され、さらに、バランスのとれた漁獲とはどのようなもので、技術的にどう具体化するのかも難問である。

この論文を契機としてさまざまな議論が始まり、ノルウェーでは国の水産政策に影響するものとして大きく取り上げられたと聞いている。漁業技術系にとって歴史的な研究課題であった選択漁獲のあり方を今後どのように扱えば良いのかは大きな問題となる。ICESのFTFB部会としては、資源系、生態系の部会と連携して新たに専門家会議を結成して検討する動きが始まっている。